

原始仏教から部派仏教の時代

釈尊のご在世の時代とその後三十年くらいは直弟子達が生きていたので、この時代を原始仏教の中でも根本仏教と呼ぶ人もあります。この時代は仏教教団は中インドに広まりつつあるまだ弱小な教団でしたが、その後は西方や南方に伝道されて行きました。

釈尊のご晩年はマガダ国が栄え、阿闍世王が王朝を創立し、その後、ススナーガ王朝、ナンダ王朝へと続き紀元前317年にはチャンドラグプタがマウルヤ王朝を築き中央集権の国家を建設しました。

その孫のアショーカ王（阿育王、紀元前268～232年頃在位）は侵略戦争を繰り返して大帝国を築きましたが、カリンガ征伐によって戦争の罪悪と残酷さを深く悟り、仏教に帰依して法を中心とする国家の建設の必要性を感じて仏教教団の保護と慈悲を広く国民に及ぼす政策を取り実行しました。恐らく、これは懺悔の気持ちからなされたことですがよほどの悲惨な光景を目の当たりにしたり、いやなことを体験して苦しんだ末のことでしょう。

アショーカ王の帰依により仏教は、新しい段階に突入したといえます。仏教は全土的に広まり、飛躍的に信者も増え、良きにつけ悪しきにつけ国家との結び付きを深めるようになったわけです。それに、アショーカ王は仏教に基づく政治理想を広く国民に知らせるため、インド中の各地に石柱や岩壁に法勅を刻みつけましたが、これは遠くアフガニスタン等の分まで含めると現在まで三〇余りも発見されています。政治は報恩行の一つとしてとらえ、病院、道路、休息所、井戸、池などを設け「法」の実践に自らも努め国民にも守らせようとしたのであり、その法とは人間の平等を説き、慈悲、寛容、忍耐を説く釈尊の簡明な教えをもととするのです。このような力を持った人物の帰依も当然、釈尊のご弘通のプログラムにあったと思いますが、王は僧伽に莫大な布施をして、ルンビニー園などの仏蹟には石碑を立て、各地に仏塔を建立しその数は

八万四千ともいわれ、国内には法の実践が行われているかどうかを調査するため「法大官」を任命、五年ごとに法の巡察を行い、国外にも法を弘めるため使臣を派遣しました。

その在家としての存在は、僧伽の外護者であると同時に比丘や比丘尼という出家のみの僧伽を越える在家信者までを含めた仏教教団の実質の指導者といえます。ですから、王の在世時代に既に仏教教団の分裂の動きがありましたが、これにブレーキをかけて止めることができたくらい力がありました。

原始仏教の時代というのは大体、仏滅後百年くらいまでを指すことになっていますが、これはまだ、仏教教団が分裂をする以前までの段階ということです。アショーカ王の即位年代がいったい、いつかは未だにはっきりはしていませんが有力な説は仏滅後一一六年説で、これによれば紀元前二七一年ないし二六八年頃となります。

ともかく、そのころまでは分裂の動きはあったものの表面上は収まっていたのですが、ほどなく根本分裂という大きな事件が起こったのです。年代は仏滅百年を過ぎる頃となりますが、分裂の原因は南伝（パーリ語仏典）と北伝（漢訳仏典）では食い違っていますが、南伝によれば西インドのヴェーサーリーの比丘達が戒律に違反する十の事項（十事の非法）を実行していたので、これに反対する保守的な層と深刻な対立をしたのです。この争いを裁くために七百人の比丘がヴェーサーリーに集まり審議をしたということです。スリランカの王統史である「島史」には、その審議後、第二回目の結集【経や律を記憶力の優れた人が誦出（暗唱）してそれを複数の人で確認し合って合議の上、経典を編集する】が行われたと伝えられていますが、北伝には伝えられていません。ちなみに、前にふれたように第一回の結集は仏滅後、直後に摩訶迦葉（マハーカーシャパ）が中心となり、阿難（アーナンダ）が経を誦出し、優波離（ウパーリ）が律を誦出し、他の比丘達が立ち会ったと伝えられています。

さて、その十事ですが 塩浄、 二指浄、 聚落間浄、 住所浄、 随意浄、 久住浄、 生和合浄、 水浄、 不益縷尼師檀浄、 金銀浄の十種類の事では前日に供

えられた塩をつぎの日の食事に供してよい、は昼食後にも一定時間内なら食事をしてよい（午後の食事は戒律で禁止されていた）、または戒律で比丘は布施としてお金を受け取る事を禁止していましたが（代理人を立てての授受は認められている）、貨幣経済が発達したため比丘、比丘尼といえどもお金をさわってはならないというのも不都合に感じられたのでしょう、この点を認めよという要求で、戒律の適用を緩やかに考えていたのがヴェーサーリーの進歩派、それに対してまったく例外を認めないというのが保守派でした。東西インドから比丘達が集まり、それぞれ四人の代表が出てこの十事について審議した結果は、長老の比丘が代表であったためにこれらは全て非法（違法）ということになりました。しかし、この決定を納得しない比丘の方が多く、その人達が集まり大衆部（マハーサンギカ = Mahāsaṅghika）を結成し、残った人々は上座部（テーラヴァーダ - Theravāda）と呼ばれるようになり分裂をしたのです。

北伝によると分派の原因は都市の人々、田舎の人々、経典を暗誦して伝持する釈尊の従兄弟であった阿難尊者系統の人々、長老の人々（竜象衆、迦鄙衆、多聞衆、大徳衆）の四衆の間に五事について異説が生じたとされます。その五事とは、部派仏教で最高の位とされる阿羅漢に対する見方で、阿羅漢にも生理的な性の欲求があり、阿羅漢でも知らない事があり、阿羅漢も世俗一般の事には疑惑を持つ事もあり、人からいわれるまで阿羅漢に達した事がわからない事もあり、必ずしも静かに世の中の有様を観察して聖道に入るのではなく「苦しい」と声を出すのがきっかけとなり世の中の無常を悟り道に入る事があるという五項目で、要するに阿羅漢の評価を非常に低くするものです。これが大衆部と上座部の分裂の原因だと伝えていきます。

この分裂は一地方の田園にあった釈尊の時代の出家を中心とした教団からマウルヤ王朝などの覇権的な王国の隆盛にともないインド全域に広まりを見せて教団としての統制力も弱まり、いろいろな都市の在家の信者の教化ができ出家と在家の頻繁な交渉が行われるにつれて両者が接近し頑なに戒律の墨守をすることが難しくなった結果でしょう。

後に大乘仏教が隆盛を来すのですが、一部異論もありますが、この大衆部は大乘仏教の振興と特に関係が深く大衆部から大乘仏教の運動が起こったといわれています。

以上の南伝の十事、北伝の五事の双方ともに共通しているのは、保守と革新というより仏教の形骸化を推し進める派と形式にとらわれずに釈尊の根本精神を汲み取ろうとする派との拮抗であるといえましょう。

根本分裂の後、二、三〇〇年の間に上座部、大衆部それぞれが更に細分裂をして十八部ないし二十部になったといわれています。現存の阿含經典はこれらの分裂した部派が所持をしていた經典ですから、既に釈尊のご入滅以来、相当な年月が経過しているわけですから根本仏教や原始仏教の思想から懸け離れていることも少なくないはずですが、ただし、それら部派の經典に共通していることは、相当古い分裂以前の思想であるということで研究が行われてきているのです。しかし、正確に言えば「共通していることの中には、原始仏教の思想が含まれていることもある」というべきで、根本仏教、原始仏教の思想を取り出すことは困難きわまりないというより、殆どそういう方法では徒勞に終わるのではないのでしょうか。

ともかく、部派仏教の時代というのは諸部派が成立して、大乘仏教が盛んになるまでの世紀前三世紀頃から世紀前後までの二～三百年間を指すことになっているようです。

後の大乘仏教の振興によっても出家中心の部派仏教は滅ぶことはなく、紀元後も勢いをたもって玄奘三蔵等にもその隆盛のさまが報告されていますが、仏教の中心はやはり在家を中心としながら在家、出家を超越する菩薩の思想を鼓吹する大乘へと移っていったのです。